

エッセイ 中東奮闘記—湾岸50年、オイルマンの軌跡

第十六回 日本オマーンクラブのさらなる活動

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

16-1. 再び、乳香のふるさとオマーンへ - 日本オマーンクラブの会員とともに

日本オマーンクラブの魅力の一つは、会員の多様性である。政治家、官僚、学者、教師、ビジネスマン、自営業者、画家、写真家、主婦、外国人などなど。

その中の一人、オイル美容で著名な日下部知世子の依頼で、私は2014年の5月下旬に、「婦人画報」による乳香の土地であるオマーン・ドファール地方での取材にコーディネーターとして同行した。参加者は、日下部夫妻とその友人男性、「婦人画報」の撮影担当と女性記者、それに私の6人。

3人が成田国際空港からアブダビ経由で、マスカットに到着。アルブスタン・パレス・ホテルに5泊して、マスカット市内の香水店や私のオマーン人の友人が次官を務めていた手工芸品店や傘下のジャバル・アフダル（緑の山）にある乳香の精油所などを訪ねて情報収集をしてからサララに飛び、日本から直接サララに入ってきた「婦人画報」の2人や日下部夫妻の友人男性と合流した。

ジャバル・アフダルは、バラの栽培で知られている。昔ながらの製法でローズ・ウオターを生産する蒸留釜は興味深かった。2000メートル超の高地の断崖に建つ「アリア・ジャバル・アフダル・ホテル」から見渡すジャバル・アフダル山系の広大な峩々たる景色も忘れえぬものであった。ホテルにあるアロマセラピーを行う施設は、同行の日下部にはとりわけ興味深いようだった。

サララでは、手工芸品店サララ支局の役人とは別に旧知のオマーン人民間ガイドもアレンジした。初日の夜は、オマーン最大の乳香市場である「ハッファー・スーク」を訪ねた。スークには様々な店が並んでいたが、乳香を扱う店々には、各種の乳香、色使いが独特な香炉、各種ブフル（沈香、白檀、バラ香油、バラ水、乳香、没薬、麝香その他を混ぜて作られる日本の「練り香」のような香料）などが所狭しと並べられていた。店番をしていたのは、バルカを付けた女性が多かった。

翌日は、サララ郊外のワジ・ムディムでベドウィンの古老アフマドに乳香採取の実演をして貰った。だだっ広い石ころだらけのワジ（涸れ河）に樹高4メートル前後の乳香樹が5、6本生えていた。

アフマドがマンガフ（Mangaf）と呼ばれる伝統的な小刀で数センチの幅で乳香樹の皮を剥がすと、白い樹液が浸み出してきた。乳香だ。2週間後に2回目のカットを入れ、その

また2週間後に3回目のカットを入れ、10日間から3週間ほど天日の下で放置すると樹液が透明で真珠のような形で固まる。それが市場で販売される乳香である。

アフマドは、幹に疵を入れながら、歌を唄った。ガイドによると「アッラーのために、国王のために、われわれ部族のために」と唄っているとのことだった。

その後サララから40キロ北方にあるワジ・ダウカ自然保護区を訪れた。整然と植林されている乳香樹の中を散策する。樹に小さな白い花がついていた。初めて見る乳香の花。公園全体が見渡せる高くなっている場所からの乳香樹が一面に広がる眺めは壮観であった。

その後に、近くのガイドの家に立ち寄り、庭先に植えてあった20本近くの乳香樹を見学、それから家に上がらせてもらい、日常生活で乳香がどう使われているのかの話を聞き、体験もした。

オマーンでは、朝と夕方に乳香を焚き、煙が立ちのぼる香炉を持って各部屋を回る。殺菌効果もさることながら、邪気を払う意味合いが強いようだ。オマーンでは、客をもてなす時に、乳香を焚いた香炉を順に回す。われわれがマジユリス（集会室）に座ると、ガイドの息子が乳香が焚かれた香炉をもって回ってくれた。

乳香やブフルは、衣装や被り物に香りを焚き込めるのにも使われる。衣装や被り物を着けて立ったまま香りを焚き込めるか、マクハラ（Maqkhara＝日本の伏せ籠のようなもの）に衣装だけ掛けて焚き込める。

帰りがけに、乳香の保管場所まで見せてもらえた。家の中の土間の片隅に乳香を詰めた麻袋がいくつも積んであった。

そのあと、ガイドの家から南東80キロにあるハヌーン（Hanun）近くの昔の乳香の販売場所と販売していた家族の住居跡（Cave）に立ち寄った。急坂を2、30メートル駆け上がった岩山を切り込むように作られた洞穴の中に数十年前までは、実際に人が住んでいたと聞いて驚く。

その後、小高い丘の上にあるハヌーンの乳香の貯蔵所跡にも立ち寄った。考古遺跡として金網の柵と石垣で囲って、保存されていた。往時は、金と同じ価値があるとされた乳香、貯蔵所も販売場所も急峻な丘の上にあるのに合点がいった。

このハヌーンは往時、乳香を北のシスルやルブアルーハーリ砂漠経由でカタールへ、さらにはメソポタミアに運んだ出発点となった場所。帰りがけに見た夕陽に映えるハヌーンの丘は、歴史的な巨大モニュメントに見えた。

翌日は、サララにある「乳香の郷博物館」と「アル・バリード」遺跡を見学した後で、40キロほど東のサムフラム遺跡を訪ねた。

オマーンには、世界遺産が5ヶ所ある。その一つが、2000年に登録された「乳香の土地」である。これは、紀元前2世紀ごろ栄えていた乳香の交易路上のオアシス都市シスル（別名、ウバル）の遺跡、紀元前1世紀末に建造されたホール・ルーリの遺跡、鉄器時代（紀元前1, 300年から前300年）から西暦12世紀末ごろまで栄えていた港町

の遺跡であるアル・バリードの遺跡、それに紀元前3千年には交易が始まっていた乳香の重要な産地となっていた既述のワジ・ダウカの乳香公園で構成されている。

サムフラムは、ホール・ルーリ（ルーリ入江）にあるかつて乳香貿易で栄えた都市の遺跡である。乳香の貯蔵所や城壁に囲まれた町の跡や神殿跡が残っている。このサムフラムからホール・ルーリを見下ろすと、西はイエメンのカナ港を中継して紅海を經由してエジプトへ、陸上をイエメン経由でサウジアラビアの紅海沿岸を北上してイエルサレムやペトラやパルミラへ、東はインドや中国へ、北はカタール・ペルシャ湾経由でメソポタミアへと運ばれた往時が偲ばれた。

サララに戻って「乳香の土地」を管理する「文化担当国王顧問事務所」でも話を聞いた。「乳香の木は、隣国のイエメン、ソマリアやインドにもあるが、オマーン産乳香が最高品質である」、「ワジ・ダウカはもともと乳香樹の自生地だったが、ラクダに食い荒らされてしまった。そこで数年前から5000本の木を植え、800本が育ちつつある」、「かつては金と同じ価値を持った乳香もいまでは割りに合わない製品となり、これに携わっていたベドウィンも他の職業に変わりつつある」、「しかし、乳香のがん等への薬効が確認されて、将来は期待できる」など。

なお、上述の取材をもとに、「婦人画報」2015年1月号に「神々の贈り物を求めてオマーン、乳香のふるさとへ」と題する15ページにわたる特集記事が掲載された。

冒頭、東方の三博士が乳香などの贈り物を持ってイエス・キリストの誕生を祝いに来た場面を描く絵画から始まり、写真や図版も豊富で、記事も読みごたえがある。さらに、マスカットで乳香を用いた香水や美容オイルを手に入れる際に、おすすめの場所まで紹介されており、最後には、駐日オマーン大使夫人と日下部知世子の対談が収録されている。

取材が終わり、オマーンから日本への帰途、アブダビに一泊した。トランジットではなくアブダビを訪問したのは、2000年以来のことだった。空港から橋を渡ってアブダビ島に入って驚いた、空き地がまったくない。私が駐在していた1977年から1979年、この辺りは郊外で、あちこちに空き地があった。それが、建物群に埋め尽くされていた。

アブダビ島に入っすぐの道路の左側には、世界最大級のシェイク・ザイード・グランドモスクの威容が迫っていた。107メートルの高さのミナレット（尖塔）、82メートルの高さのドームを含む82のドームが立ち並んでいた。建物は、4万坪近くの広さ。1996年に着工し、2007年12月に完工した。総工費は545百万ドル。

道の右側には、ホテルなどの大きなビルが林立していた。私たちは、ロタナ・ホテルに投宿した。ロタナ・グループは、アブダビを本拠地として中東、アフリカ、バルカン半島に広く進出している。われわれはサララでも、ロタナ・ホテルに何泊かした。朝食時に、マネジャーから「このホテルでは、いま52ヶ国の人々が働いている」と聞き、日本ではこれだけ多国籍の従業員を抱えるホテルは皆無、アブダビの国際性に驚いた。

日中、アブダビ興産のスポンサーだったムハンマド・ビン・サガーを事務所に訪ねた。彼と会ったのは、私がオマーン商工省に働いていたところから約20年ぶり。この時彼は79歳、若いエジプト女性を秘書にまだ現役の社長として市の中心部にある事務所で働いていた。

16-2. オマーン人留学生と日本人学生との交流 - 忘れえぬ留学生たち

日本オマーンクラブのオマーン人留学生支援活動は、クラブ設立翌年の2011年7月に日本中東学生会議と在京オマーン人学生との交流を支援したのを嚆矢とする。場所は、当時オマーン大使館の隣にあったJICA関連の建物の一室であった。

2012年には、大学間組織であった日本湾岸学生協会と在京オマーン人学生との交流を支援した。場所は、代々木の国立オリンピック記念青少年総合センター。

2013年から両国間の学生交流は拡大された。11月18日のオマーンのナショナル・デーには政財界や外交団、オマーン関係者数百人を招いた盛大なパーティーが東京都心のホテルで毎年行われ、日本全国に滞在するオマーン人留学生も招かれる。クラブではこの年から、この機会に日本人学生とオマーン人留学生の交流会を行うようにした。

場所は、中野坂上の多宝山成願寺。対応してもらったのは、「日本湾岸学生協会」と国際基督教大学に本部があった「日本学生中東会議」の学生たち。クラブ会員も出席するが、この他に駐日本オマーン大使や公使が出席することもある。

初日の午後にお互いの自己紹介から始め、テーマを決めての学生の発表やそれについてディスカッションを行う。その後には書道や折り紙などの日本文化の体験。夜は、近隣のアラブレストランでの食事会とオマーン人留学生と世話役の日本人学生が男女別に寺での合宿。この合宿はオマーン人留学生にとっては、異国で学ぶ同国人と忌憚のない会話ができる貴重な機会ともなった。翌朝は、全員で寺の本堂での座禅体験。これもムスリムであるオマーン人留学生にとっては貴重な体験。その後都内見学に出かけ、昼食を終えてから解散となる。

このイベントに、日本オマーンクラブでは宿泊費、食費と交通費を支給している。日本オマーンクラブが設立されるまでは、オマーン留学生の支援は個人ベースで行われてきた。私もその支援者の1人であった。既述の通り、私は1990年代後半から王宮府からの留学生、国費留学生、三菱商事留学生などの支援を個人的に行ってきた。外で会食したり、家にも招んだ。入学手続きや引っ越しを手伝い、個人的な相談にも乗った。なかには、ホームシックに罹った女子学生がいて、話を聞いたり、オマーンにいる父親や大使館の留学生担当オマーン人館員と連絡を取り合っただけで対応を協議したりもした。

それを見ていた三菱商事の部長から突然、「遠藤さんには、私のところの留学生もお世話になってます。失礼ですが、遠藤さんは退職されているので金銭的にも大変でしょう。会社からお金を振り込みます」という申し出があった。ありがたかったが、「私ではなくクラブに振り込んでください」とお願いし、受諾された。以来、クラブに毎年20数万円

の寄付をいただいている。日オ学生交流を実施する時の大きな助けとなっている。

三菱商事は、2010年からオマーン人留学生を日本に招く事業を始め、これまでに数十人のオマーンの若者がこの恩恵を蒙っている。その後、三井物産と住友商事も、オマーン人留学生の招聘事業に加わっている。

クラブには他にも大支援者がいる。それは、学生交流イベントに宿舎、会議場所を無料で提供してくれている成願寺の方丈の小林貢人である。翌日早朝の座禅会でも、方丈や副住職に指導してもらっている。それから、地方に在住するオマーン人留学生が上京する際にも宿舎を提供してもらっている。家族で宿泊したり、年末年始に数人の留学生が5泊したケースもあった。

日本オマーンクラブがオマーン人留学生向けにやっているもう1つの活動が、2013年から始めたラマダン月におけるイフタールの会である。イフタールとは、ラマダン月に日中の断食を終えて最初にとる食事のことである。

1回目は、当時関東圏のオマーン人学生のほぼ半数を占めていた東海大学湘南キャンパス在籍の学生を対象に、大学近くのレストランで催行した。その時には、クラブ有志が小田急東海大学前駅まで行って参加した。

2014年と2015年は、オマーン人留学生に日本中東学生会議、日本学生湾岸協会の日本人学生、日本オマーンクラブの有志が加わって池袋駅近くのアラブ料理店で開いた。

2016年からは活動を拡大して、関東地区と関西地区の2ヶ所で行う現在の形となった。関東地区の大学からの日本人学生とクラブの有志が参加し、関西では、京都ノートルダム女子大学鷺見朗子教授の世話で同大学の学生とクラブの有志が参加して行われている。

新型コロナウイルスの蔓延によって、2020年から2022年までの3年間はこの会を開催できず、その代わりにオマーンのデザートをおマーン人留学生に送った。コロナが収束した2023年4月には復活することができた。

オマーン人留学生たちは日本とオマーンの懸け橋であり、外交官でもある。東北大震災の時に、東北大学に留学していたアデルのことは、忘れられない。

2011年3月11日午後2時46分、アデルは大学の3階の部屋で授業を受けていた。その18.1秒後に強い揺れが襲った。アデルは他の学生たちと机の下に潜り込んだ。揺れは、2分ぐらいは続いた。建物が頑丈だったので、幸い崩壊は免れた。また、海岸から15キロほど離れていたため、その後襲ってきた津波の被害もなかった。

アデルが大学から帰った寮は断水していて、電気もつかなかった。30人ほどの日本人の寮生たちと助け合ったので、そう不自由は感じなかったという。

アデルは、日本人の友人と外に出て災害の救援活動に従事した。そんなところに、駐日オマーン大使から「大使館から車を回す。すぐにオマーンに帰国するように」との電話がかかった。後日大使から聞いた話だが、その後原子力発電所の事故が発生し、大使が強く帰国を勧めたが、アデルは「帰らない！ここに残って救援活動を続ける」と言い張って説

得がたいへんだったとのことだった。

結局、アデルは震災から1週間後の3月18日に帰国した。帰国後、アデルのことがオマーンの新聞に載った。見出しは、「オマーン人留学生、日本の危機対応を激賞！」とあった。そこには、「日本の役所と人々の事故対応に感謝の気持ちしかない。最高の技術、品位、プロ意識で救援活動を行った」、「地震に襲われた時は怖かったが、日本人魂に強く打たれた後に帰国した」と書いてあった。

記事の最後に、「大学が再開したら、日本に戻って勉強を続けたい」とあったが、その後アデルは東北大学に戻り、2014年には博士号を取得し、いまはスルタン・カブース大学で教鞭をとっていると仄聞している。

2009年来日し、日本語学校で2年間日本語を学んだ後に東海大学に進み、2016年に工学士の学位を得て帰国したオマーン人女性のニザールも日本に足跡を残した。大学に入学してすぐのころ、放送大学でアラビア語講座を開講する鷺見教授から「講座にアラビア人を出演させたい。オマーン人女子学生を紹介してもらえますか」との連絡をもらった。「ニザールはうら若いオマーン人女性。テレビに出るかな」と訝りながら、連絡をとると「出たい」という返事。「えっ！」と驚いた。その後私も立ち会ったテレビ撮影が無事終わり、彼女はそれから6年間日本のテレビに出演した。

在日オマーン大使館は2013年に、日本との国交樹立40周年を記念して「オマーンと日本—桜とバラがつながる交流の歩み」と題する書籍を発行した。日本の着物を着たオマーン女性とオマーンの正装をまとった日本人女性はその表紙を飾ったが、ニザールはこの時に着物姿で登場した。

ニザールより1年遅れで日本にやってくる同じ東海大学で工学士の学位を取得したハイサムのことも忘れられない。2015年7月に、日本アラブ協会が発行する「季刊アラブ」の編集に携わっていた友人から「オマーン人学生を雑誌に載せたい。適当な学生がいらないか」との電話をもらって、私が推薦したのがハイサムであった。

2015年9月発行の「季刊アラブ」の秋号に彼のことが載った。題は、「ロケット燃料と多文化性」。彼が2015年3月から1年間JAXA（宇宙航空開発機構）の相模キャンパスで宇宙ロケットの燃料の研究をし、卒論にまとめるということが書いてあった。また、彼は「日本オマーンクラブ」の活動ではオマーン人留学生をまとめるリーダー的な役割を果たし、日本との交流を進めた。

2016年にNHKBSプレミアムで放映した「体感！グレートネイチャー『アラビア神秘なる黄金の大地～オマーン』」の制作に当たって、制作会社からアラビア語の日本語訳をしてくれる留学生探しを依頼された時に、私は日本語も堪能なハイサムを紹介した。ベドウィンの話すアラビア語はオマーン人でも理解するのが難しかったようだが、彼は立派に大役を果たしてくれた。その後、彼は三菱商事社員としてマスカットとドバイで働いた。

ムナのことも忘れられない。2018年10月2日、いつものように点けたテレビの朝7

時のNHKニュースは、前夜発表された本庶佑京都大学高等研究院特別教授のノーベル医学・生理学章受賞を報じていた。

そこで流された本庶研究室の映像にヒジャブを付けた女性の姿があった。「えっ、アラブ女性？」と思ったその人が、ムナであった。彼女は2015年10月に来日して京都大学の本庶教授の下で学び、教授の研究チームの一員になっていたのである。

10月3日には、「オマーン人女性、日本でノーベル賞研究チームの一員に」という見出しで、オマーンの現地紙がムナのことを大きく伝えた。その中で、彼女は受賞の知らせを受けた時の様子について、「その日は、研究室では普通の日でした」、「オンラインで発表される30分前に、私たちは受賞を知りました。本庶先生が研究室に来て、ノーベル医学賞を受賞したので、隔週行っている報告を遅らせてほしいと言われました。そして、ノーベル賞のツイッターでの公式アカウントに掲載された写真（本庶教授を中心とした十数人の研究チームの写真。ムナも左側に大きく映っている）を撮ったんです」と語っていた。

ムナは学生時代から日本大好き人間。日本で住んで日本が魅力的な国であることを追認できたようだが、「本庶研究室では、現在の科学の枠に囚われずに、常に新しい可能性に視野を開いておくべきことを学んだ」、「オマーンに戻ったら、オマーンの科学研究に貢献したい」とも語っていた。

ムナはその後の2019年1月に、授与式などの一連のノーベル賞行事のために研究室のメンバーとともに教授のストックホルム行きに同行した。

京都大学から博士号を取得して2023年に帰国し、教授の教えを胸に母国で研究にいそんでいると仄聞している。

もう一人忘れられない留学生がいる。イサである。彼は5歳ごろにオマーンのホテルのプールで水に親しんだのを機に、13歳で水泳のオマーン代表となった。

オマーン人の父と日本人の母を持つイサは、その後母の祖国で開催される東京オリンピックに出場するという夢を持ち、日本の優れた技術を学ぶため2018年に中京大学に留学した。その後、2018年のジャカルタ・アジア大会、2019年の韓国での世界選手権大会への出場を経て、2021年に行われた東京オリンピック2020にオマーン代表として参加し、夢をかなえた。しかも、開会式ではオマーン選手団の旗手という大役を務めた。

出場した100メートル自由形では予選敗退となったが、昨年のパリオリンピック2024にもオマーン代表として出場した。オマーンでは、彼に憧れて水泳を習い始めた子供たちが多いと聞いている。

実は、イサとは、彼が生まれる前から多少の縁がある。1995年年末だったと記憶しているが、私は神奈川県在住のイサの祖母から手紙をいただいた。そこには、「私の娘がオマーンの方と結婚します。心配です。オマーンという国はどんな国なのでしょう」と書かれていた。その年の11月に私が「オマーンが見えてくる」という本を出版したことを知り、「オマーンは大丈夫な国なのか」と娘を案じる母の思いからの見知らぬ私への突

然の手紙であった。

私は、「オマーンは美しい国です。オマーンでなによりもよいのは、オマーンの人たちの人柄の良さです。温和でやさしく、親切でホスピタリティに富み、シャイで慎み深く、他人への気遣いが細やかです。日本人よりずっとよい人たちです。ご心配はいらないと思います」というような返事をさせていただいた。

このことはイサにも直接話をする機会があったが、私のこの返事がオマーン水泳界の宝であるイサ選手誕生の一助になったかもしれないとも思っている。

16-3. 日本オマーンクラブ主催の講演会 - 「ヒトはチンパンジーだった」

日本オマーンクラブが主催する講演会は、広尾のオマーン大使館内で年3回程度行って、現在までその数は優に30回を超えている。

講師は、元駐オマーン日本大使、駐日オマーン大使、オマーン研究者、オマーン人留学生など外部の識者と日本オマーンクラブの会員に依頼している。日本オマーンクラブの会員は多士済々、演題も多岐に亘る。

オマーンや近隣のアラブ諸国情勢のほか、香りの専門家による「香りの伝統—日本とオマーン」、アラビア語専門家による「アラビア語の社会」、チンパンジー研究者による「ヒトとチンパンジーとの間」、オリンピック学者による「東京オリンピック2020への基礎知識」、薬局経営者による「健康と薬」、東大地震研教授による「地震」などなど。

なかでも、チンパンジー研究者で東京大学教授の長谷川寿一によるチンパンジーの話はひととき私の心に残った。

まず、「ヒトはチンパンジーやゴリラと同じヒト属に属している」、「ヒトとチンパンジーはDNAの98.4%を共有している」、「ヒトとチンパンジーは600万年から800万年前に分かれた」という説明に驚いた。

古来、人類が生物の高みに立っていて、その他ケモノたちと同列の類人猿とは一線を画するという見方があったが、これからはほんの少し高等な類人猿であるヒト、ピグミーチンパンジーとコモンチンパンジーと少し下等な類人猿であるゴリラ、オランウータンに分けることになるだろうとのことだった。「ヒトはチンパンジーだった」ということにもなる。これは私にとっては衝撃的だった。

さらに衝撃的だったのは、ヒトとチンパンジーだけが集団殺戮（ジェノサイド）を行うことを知ったことだった。

ヒトの場合のジェノサイドとしては、われわれにはユダヤ人に対するナチの虐殺やアルメニア人に対するトルコの虐殺などがすぐに頭に浮かぶ。近現代をみると、アメリカ人によるインディアンのジェノサイド、オーストラリア人によるアボリジニやタスマニア人のジェノサイド、ブルンジでのフツ族によるツチ族のジェノサイド、クメール・ルージュによる同胞カンボジア人のジェノサイドなどなどヒトによる集団殺戮の例は枚挙にいとまが

ない。人種、国家、民族、宗教、政治的な違いを持つヒトの集団の中で、古の昔から殺戮が繰り返されてきているのだ。

ヒトは芸術、話し言葉、麻薬への嗜好などのあらゆることの中でも、動物の先駆者からもっとも直接的に受け継いでいるものが「集団殺戮」だと聞いた。チンパンジーは、計画的な殺害、隣接集団の皆殺し、領土征服のための戦争、若い適齢期の雌の略奪を行っていたというのである。ヒトも変わらない。

チンパンジーとヒトの違いは、武器を持っていないかいるかだという。武器を持たないチンパンジーは複数頭が力を合わせて相手に襲いかからなければ、殺しには成功しない。そのため、皆殺しには時間がかかる。非効率的だという。これに対し、銃という武器を持ったヒトは、一度に多数の人を殺せる。原子爆弾を使えば、一度に何万人、何十万人も殺せる。

核と結びついたヒトの「集団殺戮」は、環境資源の破壊とともに、ヒトがいままで積み上げてきたすべての進歩を灰燼に帰してしまう2大要因であると聞いた。

この話を聞いて、私には、クウェートへの侵攻を行ったサダム・フセインの顔がチンパンジーに見えていた。彼は偉そうにしてTVで話をしていたが、チンパンジーと同じなんだ。しかも、武器を持ち、それを振り回すのでより悪質だ。私には、最近TVで見る世界の指導者たちの顔もチンパンジーに見えて仕方がない。ウクライナへの侵攻をした指導者、核開発を進める近隣の国の指導者、隣の島の侵攻を公言した指導者など。

中には、核兵器をちらつかせながら相手国を脅している指導者もいる。本人は自分がチンパンジーとは思っていないだろうが、チンパンジーと同じ集団殺戮に駆り立てられている。しかも、核を持っているので、チンパンジーより始末が悪い。

ヒトが集団殺戮の業から逃れられないのならヒトはせめてチンパンジー並みになって武器を手放すか、あるいはヒト属の中のヒトとしてチンパンジーとは別離して集団殺戮の業から免れるよう進化する以外にヒトの生きる道はないだろうと私は思っている。

16-4. 両手使い能力の開発 - イスラーム社会では左手は不浄？

クラブ主催の講演を、もう一つだけ紹介したい。

オマーンクラブが設立されたのが2010年。若い会員も増えているが、設立当時50歳代の人でも60歳代、70歳代に入ってきた。こんな時の「人生100歳時代 人生後半『目の輝く人』に」という講演も興味深かった。講演者は、聖路加国際病院整形外科名誉医長、91歳で現役の井上肇医師。

同医師は、サクセスフル・エイジング (Successful Aging 「幸福で実りの多い、優れた人生をまっとうする」) を目標に「両手の会」を主宰している。会のモットーは「やったことがない。だからやる」、「しかも元気なうちに」というもの。私も参加している隔月の例会では、左手での食事の後、同医師による主に老人医療の話や左手での文字書き練習が行われて

いる。

講演は、過去60年間で平均寿命が20年伸びたという話から始まった。

1955年時点での日本人の平均寿命は男性63.60歳、女性67.75歳だったが、2023年の男性の平均寿命は81.05年、女性の平均寿命は87.09年になっている。男は、定年後20年は生きなければならない。女性も長生きになり、人生のグランドデザインも、これまでの通念は通用しないという。

シニアライフを楽しむために、シニアの男性が大切だと思うものは、第一が健康、第二がお金、第三が配偶者とのことであつた。納得できた。一方、シニア女性が大切だと思うものを聞いて、私は仰天した。第一が健康、第二がお金、第三が友達、配偶者は出て来ない。第四が趣味、第五が気力、第六が生きがい、配偶者はまだ出ない。第七によろやく配偶者が出た。そして、第八がペットと聞いた。つまり、シニア女性にとって、配偶者はペット並みなのである。

人生100歳時代になっても、死ぬ前に他人様の世話になるのは、変わらない。2017年の死亡前の要介護と要支援の平均年数は男性9年、女性は12年だと聞いた。寿命が20年伸びたのに、その半分が介護生活になる。

介護生活になる原因の疾患は、脳血管障害(脳卒中)が17.2%、認知症が16.4%、運動器障害が23.2%(うち、関節疾患が11.0%、骨折・転倒によるケガが12.2%で、57%を占める)。あとは、心疾患4.7%、高齢による老衰が13.9%、その他・不明・不詳が24.6%。

認知症は、物忘れから始まり、徘徊、意思疎通の喪失、転倒による骨折から自分で動けなくなり、最後には要介護になる可能性が高い。どんな人がボケ易いかについては、「過去を捨てない人」、「漫然と暮らし安楽に流れる人」、「新しい試みを敬遠する人」との説明であつた。過去を捨てないと新しい出会いはない、子供は新しいものに飛びつくから成長するのだという説明には、合点が行った。

講師は、ボケ対策として、①新しいことを始める②筋トレ(肩、腰、膝、CREX(身の丈に合った筋トレ)③人と接する④「両手使い能力」の取得⑤完全咬合できる歯の維持＝海馬刺激(記憶保存)⑥視力・聴力の保持⑦規則正しい生活(曜日認識のタスク)⑧ボケる前に始めようの8つを挙げた。この中で、「両手使い能力の開発」と「ボケる前に始めよう」ということが印象に残った。

また、目の輝く人になるためには、「意識武装」、「知識武装」、「技術武装」の3つが大事という。「意識武装」で一番大事なのは、容認の心。老化で心身共に下降線をたどることは自然の摂理。それを容認すれば恐怖心は和らぎ、不平・不満は無くなり、好奇心が湧き、有難うの心が生まれ、ストレスが消える。ストレスが消えれば心は平穏になり、自律神経が安定し体調も良くなる。容認を知らなければ、不平・不満・嘆き・恨みにまみれた一生となる。

二番目に大事なのは、過去を捨てること。人間が過去を捨てるべき時は、結婚時、卒業

時、定年時。定年時には、「人を動かす」から「自分を動かす」に転換し、なんでも自分でやる。それに、「何になりたいか」から「何をやりたいか」に転換が必要だと付け加えた。

「知識武装」については、いまの豊かな社会には、豊富な情報や選択肢がいっぱい。適切な選択をすることが望ましいと説いた。

「技術武装」については、今までにやっていなかったことをやることを推奨する。これがなかなか難しいことなのだが、もっとも簡単で手っ取り早いものとして、男と女が役割を交換したらよいというのが気に入った。つまり、男性が料理・買い物・ゴミ出し・掃除・洗濯・近所付き合いなどの普段の女性の技術を習得し、女性は器具・機械の修理・大工仕事などの技術を習得したらよいというのである。

もう一つ、講師は両手を使おうと提案した。理由は、①手の運動中枢は脳の中で例外的に巨大であり、手の訓練は脳に大きな刺激を与える②運動中枢の大部分は右利きの人は左脳に、左利きの人は右脳に存在するが、片手使いの反対側の脳は運動中枢としては未開発で、発展を待って居る開発待機国である。③ここを訓練により刺激すれば脳は活性化される筈で、認知症の予防効果が期待される。さらに、④両手使いになっておけば、万一脳血管障害で利き手が麻痺しても、その瞬間から反対手が利き手機能を発揮してくれるというのである。

講演には、随所にジョークがちりばめられていたのも印象的だった。その中から以下にいくつか挙げてみる。加齢に関するジョークは、「若いですねと言われたら、年を取ったと思え」、「年をとると、オシッコの後ファスナーを上げるのを忘れる。もっと年を取るとファスナーを降ろすのを忘れる」、「18歳と81歳の違い。恋に溺れるのが18歳、風呂で溺れるのが81歳。暴走するのが18歳。逆走するのが81歳（日本テレビの「笑点」から）」など。死に関するジョークは、「あの世はきっといいところ。だって誰も帰ってこないじゃない」。

この講演会は従来と同様に、在日オマーン大使館で行われた。講師から事前に「イスラームでは左は不浄の手と聞く。左手を使おうという私の話をアラブの大使館でやっているものか」との質問があった。私は、「講演会は日本オマーンクラブ主催。オマーン大使館は場所を提供してもらっているだけ。聴衆は日本人、絶対に大丈夫」と話して納得してもらった。

私は、「アラブの人は用を済ませた後はお尻を水で洗うが、その時に左手を使う。したがって左の手は不浄とされ、食事には左手は絶対に使わない」ことは知っていたが、この機会に、オマーン人の友人に「イスラームでは、左手は不浄とされているが、左手を使っただけではいけないのか。もともと左利きの人はどうするのか」ということを問い合わせてみた。

返事は、「正義という概念から右手に優位性と重要性がある。必要な時には、イスラーム法は例外を認め、厳格なルール適用を免除する。簡単に言えば、不測の事態への対処

や健康問題に対応するために左手を使う計画を立てるのは許される。両手が使えるのはよいことである」、

「右が左より優位であることは、クルアーンに記述がある。また、シャリーア（人間のあらゆる行為に関わるイスラーム教の決まり）では、左に対する右の優位性がより具体的に規定されている。人にもものを渡したり食べるのは右手でなければならない。左利きで生まれても、右手で食べたり字を書くよう訓練される。入り口では、右足から入らなければならない。しかしながら、前述したように、シャリーアでのイスラームの法域は緩和されることもある。すなわち、病気、パンデミックや飢饉のときなどの必要時には適用されない」というものだった。

最後に、追記として、「貴男が言うように、左手を効率よく効果的に使って脳を鍛えるために、私はこのメールを左手で書いている」とあった。

この講演での話には、後日談がある。昨年88歳を迎えた私の大学の同級生から、「近所の在宅介護センターに数日間滞在した。カミさんと次女が3日間の旅行に出るにつき、小生を一人で留守番させるのが不安だというので、支援センターに入れられた次第。3食付きで一日6千円で個室に泊まれる。個室が4つあるが、今回は2部屋のみが使用されていた」というメールが来た。

これに対して、私は犬を飼っている次女のことを思い出した。旅行に行く時に愛犬をペット用のホテルに預けていたことを。つまり、友人は、ペット並みの扱いを奥さんから受けていたのである。井上医師が言うように、彼はペット並みにしか評価されていないように私には思えた。

私は友人に、「ご家族から大事にしてもらっている貴兄は幸せ。わが家なら『貴男、1人でやりなさい!』と突き放される」、「ただ、老後、1人でも生き抜く力は必要。私は老後は新しいことをやるのがよいと思っている。男と女の役割を変えること、つまり食事、洗濯、掃除などの家事をやれるようになることもその一つ、5日間、1人で生き残れるように、家事を習得するのはどうか。ご一考を」「シニア女性にとっては、配偶者はペット並み。ご参考まで」と書き送った。

その後友人からの返事には、「小生も今一度生き方について考え直さねばと思います」とあった。

16-5. 「豚肉」という漢字 - アラブ人留学生向けのハンドブックの発行

日本オマーンクラブでは、他にもサマーパーティー、大使就任祝賀・感謝の会、オマーンニュース配信などを行っている。2015年からは、オマーン日本人会かわら版の「さら一む」の配信も行っている。

2013年7月23日、1970年の同日にカブース前国王が即位したのを記念したオマーン・ルネッサンス・デーには、ホームページを立ち上げた。

サマーパーティーは、会員の懇親を目的に8月に行われているが、在日オマーン大使館館員や同国の留学生も招いている。ドレスコードがあり、ドレスアップする場として、またオマーン知識を競うオマーンクイズで豪華なオマーンの商品をゲットできる場として人気がある。

大使就任・感謝会は、2014年から毎年2月に行われている。駐日オマーン大使の就任を祝うとともに、同国大使館の協力に対し感謝を示す会である。大使夫妻を始め大使館員とクラブ会員が食事を共にしながら交流できるのがうれしい。

オマーンニュースは、現地の英字新聞の記事を基にほぼ毎日配信される。オマーンのニュースだけではなく、湾岸諸国や日本と比較した解説も付与されて興味深い。

アラブ料理教室や忘年会も不定期に開かれる。アラブ料理教室は、大使館のクックがアラブ料理を調理するところを見学し、豪華なゲスト用のダイニングでいただくという形式で参加者には楽しい会である。

臨時的なイベントは、「アハジージュを見る会」、「地質標本館でのオマーン展への参加」、「生田緑地ばら苑でスルタン・カブース・ローズを見る会」、「学生による中東ファッション・ショーへの協賛」（2011年と2018年）、「大使館でのオマーン関係の写真展開催」（2012年）、「熊本地震被害地へのデーツ寄贈」、「東京湾サンセットクルーズ」などが行われてきた。

また、大使館が主催する行事にも協力してきた。「東北大震災被災地学生のおマーン招待」、「アラブ・チャリティ・バザー」や「アラブ・ウィーク」、「日オ国交樹立40周年記念書籍出版」などなど。

日本対オマーンのサッカー大会応援も行っている。オマーンではサッカーが人気No.1のスポーツ。日本とオマーンは同じアジアの国なので、アジアカップやW杯カップサッカー大会でしばしば同組になり、日本オマーンクラブはその時にオマーン応援団を組織する。

2012年の埼玉スタジアムでのW杯サッカーアジア最終予選では、会員60人がオマーン人留学生と一緒に赤地に白く「OMAN」と白く染め抜いたTシャツを着て、大きなオマーン国旗を振り回してオマーン・チームを応援した。結果は、0-3でオマーンの完敗。

2019年1月のアジアカップでは、予選の日本とオマーン戦がオマーンのスルタン・カブース・スポーツ・スタジアムで行われた。試合を放映するNHKから、「日本でのオマーン応援風景を撮りたい。協力いただきたい」とクラブに話があった。1月13日夜、クラブ会員17名と大使以下の大使館員とオマーン人留学生数名がオマーン大使館に集まり、オマーン人留学生の指揮の下、オマーンの小旗を振りながら、全員でオマーンチームを応援した。撮影時間は4分であったが、映像は日本全国やオマーン国内に流れた。結果は、0-1でオマーンの惜敗。

2021年9月大阪市立吹田スタジアムでW杯サッカー・カタール大会のアジア最終予選。日本オマーンクラブから関西地区在住の8人の会員がオマーン人留学生と一緒に、雨の中で一緒に大きなオマーン国旗を振り、小旗を持って応援した。結果は、1-0でオマーンが

勝利。日本チームはW杯初戦でのまさかの敗戦で、その後最終予選を勝ち抜くのにこの負けて大きな負担となった。

日本オマーンクラブでは、書籍の出版も行っている。オマーン人留学生から、「日本で生活するためのハンドブックができないか」という声が上がった。そこで、ジョーンズ享子会長が **Japan Basics** という留学生向けの本を英語で書き上げた。

内容は、出発準備、日本到着、日本での生活開始、日本の習慣と社会、在日オマーン人留学生からのアドバイスの5章と付表である。

「出発準備」の章では、パスポートとビザ、お金とクレジットカード、レストランと食べ物、薬・処方箋・健康、気候と衣服、日常生活に必要な日本語を、「日本到着」の章では、各空港到着時の手続き・空港からの交通手段・ホテル・一時的宿泊施設・消費税とチップ、「日本での生活開始」の章では、学校への報告・在留カード・国民健康保険・住居・ビジネス時間・授業時間・交通手段・学割・混雑度・銀行取引・食料品調達とハラール食品・洗濯とコイン・ランドリー・ごみとリサイクル・請求書支払いとコンビニ・コンピューター・携帯電話・インターネット・電話と他通信手段・日本の電気・大学でのモスク・祈祷施設、安全・治安・災害、「日本の習慣と社会」の章では、挨拶・時間厳守・日本食・宗教、「在日オマーン人留学生からのアドバイス」の章では、男女各2人の在日オマーン人学生からのアドバイスを載せた。

「別表」では、在日オマーン大使館の住所や電話番号、日本の国土・人口等の基礎情報・警察や消防署の電話番号・基礎的な日本語・役に立つ漢字（豚肉など）・日本のカレンダー・日本関連の図書・役に立つウェブサイト・日本のメディア・日本文化（茶道など）・日本に関する **Q&A** を書き込んだ。

この本は2015年2月に150部出版された。費用は、前出の成願寺の援助を得た。45ページほどの小冊子ながら、必要情報が詰まった良い本に仕上がった。

駐日オマーン大使に本を寄贈したら、「この本は良く出来ている。オマーン人留学生向けだけではもったいない。アラブ諸国の留学生に読ませたい。自分が在京のアラブ大使に話してみる」ということになった。その結果、アラブの大使館がアラビア語への翻訳を分担して出版することになり、2000年に5000部を出版した。費用は、友人が会長を務めていた「日本アラブ協会」の支援を得た。

英語版・アラビア語版ともに、世界のどこにいても読めるようウェブにもアップしたので、広くアラブ人学生の役に立ったものと確信している。

もう1冊は、2021年出版の「日本人が見たオマーンの至宝」という写真集である。

来日してオマーンが日本で知られていないことにショックを受けたオマーン人留学生が日本人にオマーンの魅力を知って貰いたいと写真展の開催を計画し、日本オマーンクラブがこれに協力することとした。具体的には、クラブがジョーンズ享子会長、岩城淳子理事主導の下で、日本人からの写真の応募、審査、入選者の発表などを、学生が入選写真の整理や展示デザインを担当した。

2019年11月12日から18日まで在日オマーン大使館で写真展を開催、クラブの広報の甲斐があって、多数の来場者を集めることができた。その後この時展示された写真を本にしようという話が持ち上がり、クラブで日本語と英語の説明文を付け、それをオマーン人留学生がアラビア語に翻訳し、日本語とアラビア語の説明文をつけた。費用は、日本オマーンクラブが負担して200部印刷した。

オマーン人学生の願いを実現するために、クラブでは、全国の主要な国公立図書館や大学や高校の図書館にうち160冊を寄贈した。

16-6. 比叡艦のマスカット訪問一日オ国交樹立40周年記念の年に当たって

日本は1971年6月1日にオマーンを承認し、翌1972年5月8日に外交関係を樹立している。2012年は、その40周年記念の年に当たった。

日本とオマーンのヒトの交流史上では、1924（大正13）年の志賀重昂のオマーン訪問がよく知られているが、志賀よりも50年以上も早い1880（明治13）年6月25日に、古川宣營陸軍工兵大尉がオマーンを訪れている。古川より一週間あまり遅れて、伊東祐亨中佐率いる比叡艦がマスカット港に入港した。

この船こそが、万里の波濤を越えて、中東の地まで航行した初めての日本船であり、また、伊東らは日本人として初めてオマーン国王に謁見、国王から親書までいただいている。

140年余りも前に、長さ70メートル、幅11メートルの小船で速力は12ノット程度（ソマリア沖、アデン湾などでの任務を終えて2023年に帰国した護衛艦「いかづち」は、全長151m、最大幅17.4m、速力20ノット）で中東の地に渡った先人たちの偉業を知っていただきたいと、私は中東調査会の「中東研究第514号」に「比叡艦のマスカット訪問の今日的意義：日本・オマーン国交樹立40周年記念の年に当たって」というタイトルで、このことを書いた。以下に概要を述べる。

（1）比叡艦のマスカットへの入港

1880（明治13）年6月26日にムンバイを出発した比叡艦は、7月3日の午前9時40分に入港した。入港の数日前から黄霧（砂漠の砂が混じった霧）で視界がきかずに悩まされ、7月2日の午後、ラス・アルハッドを過ぎてからだろうか、砂に含まれる鉄分が酸化し赤くなった塵芥が船体や帆柱などに堆積したという。3日の入港時にも、この霧のため、マスカットの沖10km程度に達するまで海岸に近づいていることがわからなかったほどであった。比叡艦は品川を出港した後横須賀で浅瀬に乗り上げているが、このときのことが伊東艦長の頭の中をよぎったかもしれない。初めて航海する海での慣れない気象状況の中である。万一事故を起こした場合にも、横須賀のときのような救援は期待できない。座礁する危険と隣り合わせのマスカット入港であった。

比叡艦の入港時の礼砲であるが、礼砲とは、通常、国交のある国の国家元首、領事、将官などに対して発せられるものである。伊東は、正式な国交が結ばれてはいなかったオマーン側に、礼砲と答砲の交換をするべきかどうかを照会した筈である。そこへ、オマーン側から礼砲を行ってくれとの要請がきたので、礼砲を発することとなった。翌4日の午前8時に国王に対して21発の礼砲が放たれ、すぐに、陸地にある砲台から同数の答砲があった。この礼砲は、中東の港において日本の軍艦が初めて行ったものであった。

(2) 国王からの贈賜品

マスカット入港後、国王からさまざまな品物が比叡艦に届けられた。

『海軍省公文書』によれば、マスカット国王からの贈賜品として以下が記載されている。

| | | |
|--------|-----|---------------------|
| 一、ブトウ | 貳籠 | |
| 一、マンゴー | 貳拾籠 | |
| 一、菓子 | 三十籠 | |
| 一、野牛 | 拾頭 | ※山羊の聞き違いによる誤記と思われる。 |
| 一、牛 | 貳頭 | |
| 一、棗 | 貳籠 | ※棗=デーツ |
| 一、桃 | 四籠 | ※オマーンにも桃がある。 |

(3) 王宮訪問と国王への献上品

7月4日、比叡艦艦長の伊東中佐をはじめとする士官12名が、日本人として初めて王宮で国王に拝謁した。

一行は、最上級の正装である大礼服を身に着けて海辺にある王宮へ向かった。ボートから降りて階段を上がると、大臣と通訳1名ずつを従えた国王が自ら一同を出迎え、一人ひとりと握手をした。この後、答礼の意を表して日本側から蒔絵の施された椅子二脚と伊万里焼の花瓶一対が国王に献上された。これらの品々を贈呈した後、コーヒーと甘い飲み物が供され歓談となった。国王と大臣が横に並んで一同と向かい合って座り、通訳はその中間に立っていた。飲み物をいただいた後、それぞれが香水と思われるもの（オマーンの風習からローズウォーターと考えられる）を一滴ずつ手に受けてから王宮を退出した。この時も国王自身中庭まで送っており、一行が非常に歓待されたことがわかる。

(4) 国王の比叡艦訪問

一行が王宮から戻って歓迎の準備も整った7月4日の午後5時に、国王が大臣、通訳、護衛の士官2名を伴って比叡艦を訪れた。この訪問に対して、同艦は天皇礼式に則って国王を迎えた。信号旗、軍艦旗などの旗がマスト及び艦首から艦尾まで飾られ、用意された国王旗もメインマストの頂に掲げられていたであろう。国王の乗ったボートが近づくと艦長以下

諸士官は舷側に立ち、水兵はマストの桁に整列して全員で祝声を三度あげ、国王がボートから降りて乗艦する時には、士官と下士官は敬礼、水兵は捧げ銃で迎え、それと同時に礼砲21発が打たれたはずである。国王の在艦時間はおよそ40分であった。

(5) 国王親書

比叡艦のマスカット滞在前半最終日、7月6日の日付で伊東は国王に書翰を送り、返信として国王の親書を得た。伊東の言によれば、国王の方から、今後交誼を厚くしたいので、将来のために文書を交換しておこうとの申し出があったので、手紙を進呈したところ返書が来たという経緯になる。

伊東が手にしたスルターン・トルキーの親書は、オマーン側から日本人に渡された史上初めてのものである。志賀重昂がスルターン・タイムール・ビン・ファイサルからの親書を手にした44年前のことであった。これが、日本に現存する中東諸国の国王親書のなかで最も古いものであることを特記しておく。

なお、現在防衛省防衛研究所に保存されているスルターン・トルキーの親書は、海軍省の公文書の中にある「寫」であり、日本語と英語の訳はあるが、アラビア語のものは、コピーもオリジナルも現存しない。ところどころに、誤記と思われる部分もあるが、以下に公文書内のままの形で掲げる。

本日附貴幹ヲ掌収シ其來旨ノ在ル所ヲ了解シ其好意ヲ嘉納ス貴艦ノ安着ヲ祝シ将来帝國艦船ノ當地ニ來泊スルヲ希望ス予ハ之ヲ待スルニ相當ノ禮ヲ以テセントス

千貳百九十七年リジエツト月二十七日

西曆千八百八十年七月六日 マスカット港ニ於テ

マスカットサルタン王 トルキー、ビン、サイート

日本帝國軍艦比叡号

艦長

中佐祐亨貴下

Translation

To Captain Sukukei Commanding

His majesty the emperor of Japanese Corvetto Hi-Yei

Mascot Harbour

Dated Mascot 27th Rejet 1297

6th July 1880

A.C.

Your esteemed letter of these date has been received and what you have written therein we have understood and we thank you for the sentiments conveyed therein. We were pleased to hear of your arrival and shall be glad if the Emperor's ship call here. We shall not fail to extend to them the courtesy which is their due at our hand

Sdj Taorkee bin Sa'eed

Sultan of Mascat

因みに、香港で比叻艦を降り郵便船でペルシャに達した吉田正春が、伊東から遅れること約3か月、ペルシャ国王からの親書を受け取っている。こちらは、外交史料館に実物が残されており、ペルシャ語と英文のものが一対となっている。

(6) マスカット出港以後

7月6日午後6時35分、比叻艦はマスカットを抜錨し、ペルシャのブシェール港へ向かった。そこで使節団に同行していた大倉組の荷物を積みこんだ後、ブシェールを出港し、同月26日、再びマスカットへ投錨した。29日に出発し一路日本へ向かい、品川港に到着したのは9月29日で、4月6日の出発以来、ほぼ半年にわたる航海であった。

なお、比叻艦の航海日程の概略は以下の通りである。

1880 (明治13) 年

- ・ 4月 5日 (月) 古川宣誉、吉田正春使節団の一員として吉田とともに比叻艦に乗艦
- ・ 4月 6日 (火) 品川発
横須賀出港時に、浅瀬に乗り上げる
- ・ 4月 8日 (木) 磐城艦の牽引によって、比叻艦は浅瀬から脱出
横須賀発
- ・ 4月23日 (金) 香港着
吉田、比叻艦から下艦し、郵便船に乗ってブシェールへ
- ・ 4月27日 (火) 香港発
- ・ 5月 5日 (水) シンガポール着
- ・ 5月 8日 (土) シンガポール発
- ・ 5月21日 (金) トリンコマリー着 ※セイロン (現在のスリランカ) の港
- ・ 5月27日 (土) トリンコマリー発
- ・ 6月 6日 (日) ムンバイ着

- ・ 6月19日（土） 古川、比叡艦から下艦し、イギリス船ソコトラ号に乗船
- ・ 6月26日（土） 古川、マスカットに上陸し、市街を見物する
- ・ 6月26日（土） ムンバイ発
- ・ 7月 3日（土） マスカット着 午前9時40分
- ・ 7月 4日（日） 午前8時 オマーン国王に対しての礼砲とオマーンからの答砲
国王から比叡艦に贈賜品が届く
国王へ日本からの献上品を贈る
伊東祐亨中佐、本宿宅命大尉など12名が王宮で国王に謁見
午後5時 国王が比叡艦に来艦
- ・ 7月 5日（月） 王宮へ比叡艦より医官を派遣
- ・ 7月 6日（火） 伊東、国王へ書翰を送る
国王から同日付の親書が伊東に届く
マスカット発 午後6時35分
- ・ 7月 9日（金） ブシェール着 ※ペルシャ（現在のイラン）の港
- ・ 7月23日（金） ブシェール発
- ・ 7月26日（日） マスカット着 午前10時55分
艦内に石炭を積み入れる
- ・ 7月29日（木） マスカット発 午前6時
- ・ 8月25日（水） シンガポール着
- ・ 8月28日（土） シンガポール発
- ・ 9月 5日（日） 厦門（アモイ）着 ※清（現在の中国）の港
- ・ 9月11日（土） 厦門発
- ・ 9月18日（土） 兵庫着
- ・ 9月27日（土） 兵庫発
- ・ 9月29日（水） 品川着

（7）比叡艦のペルシャ湾派遣の目的

海軍省から太政官に提出された上申書には、航海の目的について「実地研究」としか記されていない。この言葉からは、兵員の練度を高め、士官には航海術に習熟させることが第一に思い浮かぶが、それだけではなかったはずである。

日本に帰国してから伊東が海軍省に提出した報告書の項目から、その一端を垣間見ることとはできる。すなわち、(a)『比叡艦印度洋航海日誌』、(b)『比叡艦印度洋航海水路誌』、(c)『熱帯地方健全學拔萃』、(d)『印度洋航海中勸農局・開拓使・鎮守府依頼之物品試検表』、(e)『印度洋航海中各地物價表』の5つである。

艦船の運用、乗員の健康など直接軍事にかかわること以外にも広く情報を収集することが伊東の任務であり、比叡艦派遣の目的であったことが窺われる。比叡艦のペルシャ湾派遣

の目的については、吉田正春使節団の「便船」として用いられる以外にもあったのである。

(8) 伊東祐亨

ここで、伊東の経歴を簡単にたどってみたい。旧薩摩藩士で戊辰戦争にも参加した伊東祐亨は、初代の聯合艦隊司令長官であり、軍人として最高の名誉である元帥の称号まで与えられながら、忘れられた提督とでもいうべき存在である。日清戦争時の部下であった東郷平八郎が日本海海戦においてロシアのバルチック艦隊を破ったことで国民的英雄となり、その陰に隠れてしまったためと思われる。しかし、黄海海戦で清国の北洋艦隊を破ったという実績に加え、日本の艦船（民間の船を含め）として初めてペルシャ湾を航海することになった比叡艦を指揮し、猛暑によって直接乗員を失うことなく無事帰国まで導いた指揮統率力については、高く評価されるべきであろう。

(9) 榎本武揚と比叡艦及び吉田正春使節団派遣

比叡艦がマスカットを訪問したのはペルシャ訪問の途次であったが、このペルシャ湾行きを立案したのは、当時の海軍卿榎本武揚中将であった。榎本は、古川陸軍工兵大尉が参加した吉田正春使節団の発案者でもあった。軍艦と使節団をペルシャに派遣するという計画の直接のきっかけとなったのは、明治11（1878）年5月に当時駐露全権公使であった榎本がペテルブルクでヨーロッパ旅行中のペルシャ国王に会ったことである。その後駐露ペルシャ公使とも会談した榎本は、通商条約を結ぼうというペルシャ側の意向に対して、条約を締結する前段階として、まずは商人を出張させて現地のマーケットリサーチを行うことを約束したのである。

これに基づき、団長の吉田には、当初の市場調査を行う商人の保護監督から大幅に拡大された。まず、法制、国王や貴族の権限、宗教、宗教的指導者の権限、兵制、外交、財政、税法、貿易、慣習、教育、地理、市街、港湾などの状況についての報告が求められ、その報告も新たに加えられた訪問地トルコについても行うこととされた。これだけ見ても使節団の目的が、単なる通商上の視察とは言えないだろう。榎本の前職は在任4年に及ぶ駐露全権公使であり、その間に樺太・千島交換条約を締結し、また日本への帰途シベリアに立ち寄り詳細な日記を残している。当時の日本随一のロシア通とっていい榎本が携わっているからには、計画の土台にロシアの南下政策に対抗するための情報をとるという構想があったとみても不自然ではないと思うが、どうだろうか。

(10) おわりに

本稿の終わりに際して、比叡艦のマスカット訪問が、以下の諸点から日本オマーン交流史上において画期的なものであったことを改めて指摘しておく。(1)オマーンの港に入った最初の日本の艦船が比叡艦であること。(2)オマーン国王に初めて拝謁した日本人は、艦長の伊東祐亨中佐と随行する士官であること、(3)オマーン国王から日本人に渡された史上初めての親書は、伊東に与えられたものであること。(1)については、入港時に礼砲を交わし

ていることから（国交のない国とは、礼砲を交換しない）、来年（2012）国交樹立40周年を迎える日本とオマーンの二国間関係の起点と位置づけていいかもしれない。湾岸戦争後の掃海任務を終了した海上自衛隊の艦船が1991年にマスカット港に寄港して以来、イラク戦争、ソマリア海賊対策、遠洋練習航海等で日本の軍艦のオマーンへの入港が続いている。伊東が得た親書の中の「オマーン側が貴艦ノ安着ヲ祝シ将来帝國艦船ノ當地ニ來泊スルヲ希望ス予ハ之ヲ待スルニ相當ノ禮ヲ以テセントス」といふスルターン・トルキーの心は、比叡艦から一世紀あまりの時を経た現在も生きていけると言えよう。

比叡艦は、両国親善の礎となることによって日本・オマーン交流史上に新たな一ページを加えただけではなく、日本史上にも大きな足跡を残したことも忘れてはならないだろう。同艦がマスカットへ投錨する以前、日本の船舶はアラビア海を横断したことはなかった。マスカット出発後、ペルシャのブシェール港へ向かう途中に通過したオマーン海、アラビア湾を航海したのも比叡艦が初めてなのである。同艦は、イギリスに発注して造られた当時の日本海軍の最新鋭艦ではあったが、動力の燃料には石炭を用い、風向きによっては機関を止めて帆走した機帆船である。イギリス製の水路図こそ持っていたが、現代の高性能のエンジンを備えた船舶の半分以下の速力で猛暑の中を走り続けることの困難さは、筆者の想像をはるかに超えるところである。今日、日本に輸入される石油を運ぶタンカーのおよそ80%が、明治13年に比叡艦が巡航したのと同じ航路、すなわち、アラビア湾、ホルムズ海峡、オマーン海、アラビア海を経由して来る。日本経済にとっての大動脈である航路の先駆者であるとも言うべき比叡艦の存在が広く一般に認知され、日本史上に適切な位置を与えられることを念じて本稿の結びとする。

以上が「中東研究第514号」所載の私の論文から、比叡艦のマスカット訪問に関する部分の概要をまとめたものである。話の流れの上で省略せざるを得なかったが、日オ交流史上に足跡を残した人物をあと1人だけ簡単に紹介しておきたい。

その人物とは、本宿宅命海軍大尉である。彼は伊東祐亨とともに国王に謁見し、その時のことを「波斯湾航海記事」に書き残している。幕末からの日本海軍草創期の歴史を勝海舟がまとめたときには編集を担当し、勝の信頼を得、その後順調に出世したが、オマーン訪問の12年後に41歳という働きざかりの年齢で病没した。彼の葬儀には、勝海舟、榎本武揚などの日本史上に名を残した人々を始めとして、1000人あまりが参列したという。いかにその才能を惜しまれたかがわかる。

なお、論文では、記録上、初めてオマーンに上陸した古川宣誉の経歴と動向や、榎本武揚が比叡艦のペルシャ湾派遣を立案した経緯の詳細などにも触れている。